「ユニセフ子ども物語」

地球に住む子どものいろいろなくらしを知ろう

Republic of El Salvador

エルサルバドル共和国

あそぶなきけん！地雷に注意！

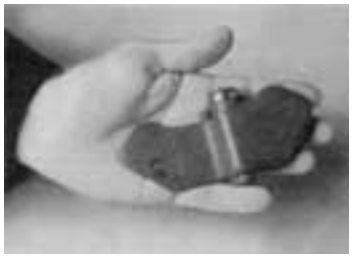
マービン君は、どこでも見かけるごく普通の男の子。一つだけ違うのは家の近くに地雷がうめられているってこと。

マービン君の住んでいるのはエルサルバドルという国のサンタクララという小さな村です。この国で、1979年から12年間も、政府と政府に反対する人々が対立して戦っていました。国民の半分以上がくらしていた農村が戦場になり、兵士だけでなく、お年よりや女の人や子どももたくさん殺されました。家や学校も壊されました。畑に地雷を埋められて、米も豆もコーヒーもトウモロコシも作ることができなくなり、貧しくなりました。内戦は1992年に終わりましたが、あちこちにまだ地雷が残っています。しかも、一番犠牲になりやすいのは、何も知らない小さな子どもたちなのです。

今、マービン君は、村にやってきた「地雷に気をつけよう教室」に参加しているところです。ユニセフの訓練を受けた先生が、子どもたちに「さあ、それでは、もし道や畑で、この絵のような見慣れないものを見つけたらどうすればよいでしょうか？」と聞きました。マービン君が手をあげて、泥だらけの顔を誇らしげな笑顔でいっぱいにして答えました。「みつけたら急いで逃げます」「はい、そうですね。近寄って見たり、さわったりせずにその場所を離れなければいけません」と先生はいいました。「でも、それだけじゃ足りないんですよ。わかるかな？」マービン君は急にしょんぼりしてしまいました。（逃げるだけじゃだめなのか。どうすればいいのかなあ……）

米ソの支援を受けて戦っていた両者でしたが、冷戦の終結を受けて1992年に、国連があいだに立って、政府と反政府勢力（FMLNという名前です）はようやく停戦の約束をしました。その時、政府側は兵士の数を半分に減らすこと、反政府側（FMLN）は武器を全部捨ててふつうの政党になることなども決めました。ユニセフはその後、政府とFMLNの両方と協力して、危険な地雷を取り除く仕事をはじめました。

最初の仕事はどこに地雷を埋めたのかを両方に聞いて、そのあたり一帯を柵で囲むことでした。でも、どこにあるかわからない地雷もたくさんありました。だから、つぎの仕事は、人々が地雷に気をつけるようにすることでした。ユニセフは、政府軍とFMLNが提供した地雷の写真と注意書きをのせたポスターを作って配りました。**さわってはだめ！そのままきた道を引き返してここに連絡して！**民間団体（NGO）のひとつが電話を24時間受けつけました。そこから、政府が依頼したベルギーの会社に連絡して見つかった地雷を処理してもらうのです。



地雷のひとつ　©UNICEF

このことは新聞やラジオ・テレビでも宣伝しました。しかし、それだけではたりないので、ユニセフは、車で村々をまわって直接人々に呼び掛ける移動教室をはじめました。それが、今マービン君が参加している「地雷に気をつけよう教室」なのです。

皆さんは、マービン君が地雷を見つけたら何をすればよいのかわかりますか。

実は、これら多くの人々の努力が実って、1994年から1995年にかけては地雷による死者はなくなりました。その後もマービン君の国では、多くの人々が力をあわせて難しい問題に取り組んでいます。外国もお金を貸したり、技術で協力したり、できることをやっています。

この国の例が、地雷に苦しんでいるほかの多くの国のよい見本になることを願ってやみません。

問いのこたえ：マービン君は地雷を見つけたら、そのまま、きた道をひき返して地雷処理をしてくれる団体へ連絡する。

©UNICEF

地雷について

戦争が終わっても何十年も生き延びて、なおひそかに獲物を待ちつづける恐ろしい武器、それが地雷。

世界では今日も数十の企業により、大量の地雷が生産され、誰かに買われ、どこかに埋められている。現在64ヶ国に約1億1000万個もの地雷が埋められており、毎月800人が命を奪われている。一番の犠牲者は子どもである。下腹部に重傷を負い、失明し、手足を失う子どもたち。しかも、鎮痛剤さえないところでそれが起きる。エルサルバドルでは、なんらかの治療を受けられたのは犠牲になった子どもの20%以下であるという。

エルサルバドルについて

面　積		約2.1万km²（四国より少し大きい）
人　口		約505万人（人口密度は中米で最高）
用　語		スペイン語
民　族		インディオと白人の混血84%、白人10%、インディオ6%
宗　教		カトリック
気　候		平野部は23〜28度、高原地帯は17〜20度
産業	農　業	輸出用産品――コーヒー・砂糖・冷凍エビ・綿花（農産品の輸出による外資収入は総外貨収入の67%） 国内自給用作物―トウモロコシ・米・豆（生産量が少ないため、不足分は輸入している）
	工　業	食品・繊維・衣料・履物・家具

人口の51%が農業人口。人々は粘り強く忍耐力があり、勤勉なため「中米の日本」と呼ばれている。人口密度が高く、工業も盛んだが、原材料を輸入に頼っているので外貨不足が生産に影響する。

エルサルバドル内戦の歴史

マヤ文明の中心地の一つ
1524年スペインに征服される
1841年完全独立

1870年代　コーヒー生産による新しい資本家層出現（コーヒー土地貴族）
大多数の農民や労働者を支配するようになる

↓ 1929年世界大恐慌 農民労働者を直撃 ↓

大地主、資本家、軍関係者　　農民・労働者

↓ 共産党関係者などを弾圧 ⬅ 対立激化 ➡ ゲリラ闘争の開始 ↓

1979年
保守系リベラル派のクーデターにより革命評議会設立。
土地改革・銀行の国有化など民主化と不公平の是正を掲げるが失敗

⬌

1980年
ファラプンド・マルテイ民族解放戦線（FMLN）が結成され、本格的な内戦に突入する

↓ 何度か和平のための対話が試みられるが失敗 ↓

1990年　国連の仲介でようやく対話再開
1992年　1月にメキシコで最終合意が成立

現在、外国の投資も再開し、順調に民主化に移行しつつある

エルサルバドルの農園別経営規模別土地分布状況（1971年）

経営規模	農園数	全体に占める%	農園の面積(ha)	全体に占める%
1ha〜未満	132,907	48.78	70,568	4.83
1〜19ha未満	128,551	47.17	453,242	31.03
20〜99.9ha未満	9,013	3.31	367,907	25.19
100〜199.9ha未満	1,115	0.42	153,514	10.51
200〜499.9ha未満	640	0.25	192,250	13.16
500〜999.9ha未満	141	0.05	96,547	6.61
1,000ha以上	65	0.02	126,670	8.67
合　計	272,432	100.00	1,460,698	100.00

出所：USAID、1984
人口の1%に満たない100ha以上の農園主が国の40%近くの農地を所有していた状況がわかる。

エルサルバドルの子どものデータ

5歳未満児死亡率 1000人あたり	1960年	1994年
	210	56

安全な飲み水を手にいれられる人の割合	都市	農村
	78%	38%

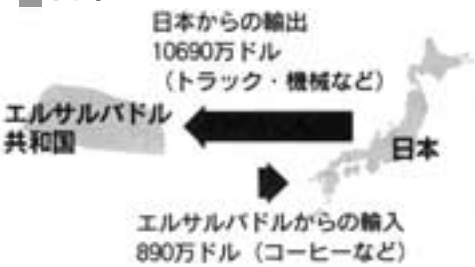
小学校の1学年に進学したものが第5学年に在学する率

＊ユニセフ「世界子供白書1996」より

エルサルバドルの食事

トウモロコシの粉を練って丸く平たくして焼いたトルティーヤが中米に共通の代表的な主食だが、厚みや中にいれるものなど土地によっても少しずつちがっている。豆料理や肉、お米を油でいためて炊いたものなどをいっしょに食べる。

エルサルバドルと日本と



くらべてみよう

日本の財閥は、どのようにしてできたのだろう。また、日本では戦後の農地改革はどのようにして行われ、農民の生活にどのような変化があったのだろう。

参考文献
「エルサルバドル　開発途上国経済協力シリーズ」（財）国際協力推進協会
「世界各国経済情報ファイル　1995」日本貿易振興会監修
「海外進出企業総覧1995」週刊東洋経済